桜庭康喜・元名寄市長インタビュー

私の自治の歩み　その3

1　市職員になって組合活動に熱意を注ぐ
2　組織内候補が決まらず市議選に立候補
3　自前候補による市長選勝利が悲願、敗北覚悟の出馬（以上、前々号）
4　疾風怒濤の市長3期10年
5　短期大学の看護学科設置に奔走（以上、前号）
6　職員が身を削ってできた新病院
7　革新首長の市政と妨害
8　五十嵐広三さんの後を受け、衆院選に立候補
9　ライフワークとして全国3300市町村を訪問（以上、本号）

6　職員が身を削ってできた新病院

職員給与を削減して市立病院を新築

（大きな事業だった市立病院の新築建て替えについてお聞きしたいのですが、新築は桜庭さんが市長になってから決まったのでしょうか）

若い頃に市立病院に勤務していたので、老朽化して手狭な病院ではどうにもならない、一日も早く建て替えなければと思っていました。JR名寄駅から直線道路で病院とつながっているのが現在地で、一九九二年に新病院ができました。

現在地で建て直すか、別の場所にするか、紆余曲折ありましたが、結局のところ現在地での建て直しで良かったのかなと自分を納得させています。私は当初、手狭で駐車場が少ないため、建て替えるのなら移転と考えていました。広いところに移し、老健施設（介護老人保健施設）をはじめ福祉、介護関係の施設を併設する構想を持っていました。

市長に就任したとき、助役を頼んだ先輩から釘を刺されました。どんな病院をつくるかは桜庭市長の役割だけど、建設場所は前市長がここだと決めているのだと。商店街からは、病院が移ると駅前通りの商店街が維持できなくなるとの陳情もあり、現在地で建て替えることに決まったというのです。

病院を新築するため自治省に七〇億円の公営企業債の発行を認めてほしいと言うと、公営企業課長に「市長ね、とち狂っているのではないのか、頭を冷やして出直しておいで」といわれました。当時、市は財政健全化計画の取り組みの真最中で、七〇億円の借金をして病院の改築を考えるのは尋常ではない。まず、健全化計画をやり遂げてから出直してこい、ということでした。

私は、課長の言うことはもっともなことで、健全化計画は必ずやり遂げます。ただ、健全化計画が終了してからの病院改築では、それまでに名寄市民が何人死ぬか分かりません。市民の命を一人でも救うためには、一日も早く病院をつくらなければなりません、なんとか理解してほしい、と訴えました。

すると課長は横を向いて、うそぶくように「市長がそんなに病院をつくりたかったら、職員の給

与を一号俸引き下げてでもやる決意があるなら話は別だ」という。

一緒にいた秘書係長に「いま課長の言ったことを書け」と年月日と時刻もいれ、読み返して課長に念を押しました。課長、二言はないですね、職員給与を一号俸引き下げたら、約束どおり公営企業債を認めてくれるのですねと迫ると、それくらい決意があるのはたいしたものだと課長も認めました。

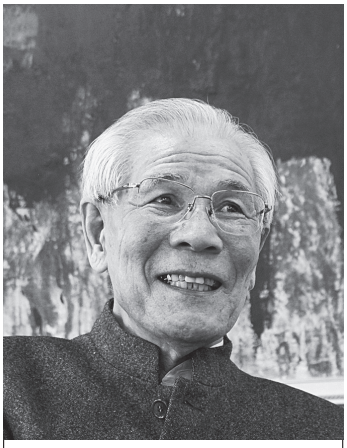
名寄に戻ってきてすぐ、自治労名寄市職労に職員給与一号俸引き下げの提案をしました。当然、組合は怒ります。市職労が懸命に頑張って当選させた市長からの最初のプレゼントが、給与削減なんてことがあるのかと猛反発されました。一期目後半のころでした。

給与削減の提案が理屈に合わないことは百も承知なので、処分しないから、なんぼでもストライキやってくれと言うと、当時の山谷委員長にストライキを決めるのは市長ではなく労働組合の委員長だと怒られましたね。三日三晩、深夜の団体交渉がつづきました。

職員の給与一号俸引き下げが月五千円だとして手当を入れると年間一〇万円くらいの削減です。組合の試算では生涯給与で約三〇〇万円減の影響があると抗議されました。

私が最後に言ったのは、一号俸下がっても職員と家族が路頭に迷うような生活苦に陥ることはないと思う、給与を下げることで市民の命が救えるのだからなんとか勘弁してほしい。その代わりと言っては変だけど、給与を一号俸下げて、職員自身の身を削ることによって、新しい病院ができたことを、市長のときはもちろん、市長を辞めてからも機会あるごとに、このことを書き、言いつづける。職員は自分たちの身を削ったお金の使い方が明確になれば、理解をしてくれる、市民とともに歩みつづけると言いつづけるから、と職員組合を説得しました。

最終的には、組合が推して誕生させた市長だから、仕方が無いと不承不承給与削減の提案をのんでくれました。その後市立病院の開業六〇周年記念誌にも書いたし、とにかく機会あるごとに、職員が身を削ったからできた病院だと書きつづけ、言いつづけています。



桜庭康喜（さくらば　やすき）

1942年北海道名寄市生まれ。1962年札幌短期大学（現札幌学院大学卒業）、63年名寄市職員、1971年名寄市議会議員（四期一五年）、1986年名寄市長（三期一〇年）、1996年北北海道地域活性化センター理事長、2000年北北海道国際文化交流協会代表、2008年～18年北海道地方自治研究所理事、2009年旭川大学大学院非常勤講師など。1996年、五十嵐広三さんの後継として衆議院選挙に立候補し落選（2000年衆院選落選）。主な著書に、全国青年市長会編『青年よ、故郷に帰って市長になろう』(1994年、読売新聞社)、『消えたマチ　生まれたマチ』（2010年、北海道地方自治研究所全国市区町村訪問記録編纂委員会）。

病院敷地拡張と民有地買収
深夜に住宅移転抗議の電話

（公営企業債のことをはじめ、病院の新築にはいろいろ苦労があったと思いますが）

現在地はとにかく狭いので、敷地を広げるには隣接する民有地の買収が必要なのですが、そこには四〇戸の住宅がありました。地主は一人で、四〇戸全て借地だったこともあり、住んでいた人に移転補償をして移ってもらい、新しい病院を建てることができました。

病院の敷地を拡張するため、四〇戸の民家を二年間で移転してもらいました。当時の自治省公営企業課長の予想を覆したのです。二年間で四〇戸の住宅を動かして、工事にかかれなかったら、市長はどう責任をとるのだと課長に釘を刺されましたが、私はやりますと断言しました。

課長にしてみたら、二年間で住宅を動かすことはできないだろうから、病院建設のはなしは潰れると当初思ったはずです。東京の発想で四〇戸の民家を二年間で移転するには、時間がないし、膨大な移転費用が必要だと考えたはずです。それを二年間でやり遂げました。

住宅を移転してもらうのにこんなことがありました。ある日、午前零時過ぎの深夜、自宅に電話があり、相手は酔っぱらっていて「市長、お前がいくら頑張ったって、俺は絶対に動かないからな、移転の承諾書に判は押さんからな、覚悟しとけ」と。電話の声を聞いて、あの親父だなと分かり「そんなこと言わないで、いまこれから行くから話をしよう」というと、「こんな時間に来るというのか、俺が誰だか分かるのか」。

「分かるから、いまこれから行くから」と電話を切り、移転を担当していた高校のときの同級生の花井君の家に電話をし、「〇〇の親父がこんな夜に俺のところまで電話をよこすのは相当悩んでいるからで、夜遅くに悪いけど、ちょっと一緒に行ってくれないか」と二人で訪ねました。

家を訪ねると灯りがついていたので、ドアをノックすると「誰だ」と声があり、「桜庭です」というと「本当に来たのか」となかに入れてくれた。「ビールにするか、焼酎にするか、日本酒にするか」と聞いてくるので、判を押してくれたら決め酒に飲むと言うと、「分かった、分かった、どの書類に判を押せばいいんだ」とグズグズ言っていた人が同意しれてくれた。そういうエピソードがいくつもあります。

四〇戸全部移転できたのは、住宅所有者の土地が個々人の所有地ではなく、藤田さんという人の借地だったからで、まとまった土地を切り売りしたくなかった。公共の用に供するというのであれば、親類縁者への大義名分が立つと考えていた地主さんだったので、何とか上手くいきました。

また、場所が私の自宅に近く、市議時代から交流のあった顔見知りの人が多かったということもあって何とか地権者の理解を得ることが出来たのではと思っています。

でも、職員には苦労かけましたね。建物の構造からはじまり、議会では責められました。なにしろ、市長を支えるのは少数会派だし、私が議員時代のときの助役が議員（新田さん）になり、その人が急先鋒となってことごとく追求されました。

新病院で新しい体制をつくる苦労

（病院全体の経営をどうしていくかという課題もありますね）

新しい病院になるのにともない、その後の病院院長を誰にするかという課題がありました。名寄市立大学の初代学長の久保田宏さんは、名寄高校の先輩で、北大理学部で数学を勉強し、その後北大医学部で学び医者になりました。市立旭川病院に勤めているときに、名寄出身なので院長候補に紹介され、来てもらうことになりました。ただ、現院長の任期が数年あるので、それまでの間、診療部長として勤める話をすすめていたところ、市立旭川病院の院長から、名寄の事情は理解したので久保田さんが名寄にいくのは承知したけど、一つ条件があると。院長候補予定者として副院長のポストを用意してくれるのなら、旭川から名寄に移ることを認めるという。

小さな病院ながら、小児科と外科の医師二人が副院長をしていましたが、副院長にしないと久保田さんが移ることは認めないというので、二年間、副院長三人体制をとりました。

その後、久保田さんが院長になるにあたって、一つ条件が出されました。市立旭川病院に勤務している看護師を、名寄市立病院の総婦長（現在は看護師長）にしてくれるのであれば、院長を引き受けると。これまでの名寄市立病院の古い慣習を打破しなければ、いい病院運営はできないと感じたのかもしれません。

そこで市立旭川病院の院長に看護師の派遣の相談にいくと、いつ移っても構わないと言うのです。じつは、その看護師はその年度の三月で定年退職する予定だったのです。六〇歳で定年退職した人を、嘱託で総婦長にすることは病院の理解を得ることができないので、困りました。

部長会議で職員時代の先輩の岡本助役から、定年退職した人を総婦長にすることはできないと一蹴され、ほかの部長もそんな人事はできないという意見です。帰宅してからもこのことが頭から離れず寝床に入っても何か妙案はないかと考えていた時、ふっと思いついたのです。名寄市立短大の看護学科の教員として採用すれば、定年はたしか六三歳でした。そして看護学科の主要な実習は名寄市立病院なので、実習担当の看護教授として市立病院に常駐してもらい、総婦長も兼務してもらうことを考えついたのでした。

翌朝、すぐ臨時の部長会議を開き、昨晩寝ない

で考えたと説明すると、助役以下部長たちは、そんな方法があるのかと驚いていましたが納得をしてもらうことが出来ました。それで来てもらうことが出来たのです。

1・5次医療の脳神経外科をつくる
広い廊下にするため設計変更

（市立病院は道北地域の拠点病院になっていますね。病院の運営や市立病院としての役割をどう持たせるかに苦労した点はありますか）

名寄市立病院は道北地域の中心的な役割を担っていて、病院を新築するときは脳神経外科をつくることを考えていました。士別、名寄はじめ、道北地域に脳神経外科の病院がなかったので、例えばくも膜下出血になると、旭川日赤病院まで搬送しますが、二時間から二時間半くらいのうちに措置しないと、危険な状態になります。名寄からがギリギリの距離で、名寄からさらに北だと延命が難しくなる。名寄市立病院に脳神経外科をつくることができれば、道北地域の人の延命に寄与できます。

脳神経外科は医療機器を揃えることが必要でお金がかかる。しかしあまり病院の収入にならないので、議会で随分議論になりました。結局議会に提案したのは、本格的な脳神経外科はお金がかかるので、一・五次の脳神経外科にすると。

それはなにかというと、上川管内最北の中川町でくも膜下出血の患者がいたら、名寄に救急搬送して措置をする。その後、旭川日赤病院か旭川医大病院に搬送することで延命できる。旭川でしっかり治療してもらうため、名寄は一・五次の対応をする脳神経外科をつくると説明し、議会にはどうにか納得してもらいました。

幸運だったのは、脳神経外科ができて旭川医科大学から佐古先生に赴任してもらいました。旭川医科大学が脳神経外科の医師を地方に派遣する最初の年でしたが、医師の派遣を希望する私立病院は多々ありましたが、公立病院は一つもなかったそうです。

旭川医大へ相談にいったら、名寄市立総合病院で医師を受け入れてくれたら、私たちの実績になりますから協力しますと言われ、その後の医師派遣も順調です。

当時、市長の力はすごいなと思ったのは、素人の私が市立病院の設計を変更し、廊下を広げたことです。病院の廊下には、点滴のスタンド、ストレッチャーなどが置かれるようになり、建築基準法の基準で廊下幅をつくると、必ず手狭になることは、病院勤務の経験で分かっていました。もし、火災などの災害があったときは大変なことになります。

図面をみて説明を受けたとき、これではダメだ、とにかく病院の廊下の幅は広くすると言いました。市の建築技師や設計会社は、限られたスペースのなかで廊下を広くしたら、病室が狭くなると納得しない。私は、廊下に物が置かれるようになるのだから、とにかく広くしてくれ、その分病室が狭くなっても仕方がないと決断し、設計変更しましたが、市長の権限はすごいものだなと思いましたね。

設計変更は間違いではないと思っており、いまの名寄市立病院が自慢できるのは廊下の広さです。

7　革新首長の市政と妨害

当初予算（歳入不足）を議会で修正される

おそらく、名寄市政上、当初予算が議会で修正されて可決したのは、私のときしかないと思いますね。

（財政の面では厳しい運営を強いられたし、議会とは緊張感をもって相対していたということですね）

こんなことがありました。当初予算の雑収入で三億円（赤字）を計上しましたが、入ってくる見込みがない。それなのになぜ、予算に計上しのかというと、市民そして職員にも、市財政が大変なことを知ってもらうための材料にしたいと思ったのです。

入る当てのない三億円を見込まないと予算が作れませんでした。明らかに赤字予算なのですから、その分をどこかで節約しないと、決算は赤字にな

るので、支出を切り詰める。市の財政が大変なことを具体的に数字で示して分かってくださいと、住民懇談会で説明し市民も職員も市財政の逼迫した状況を現実のものとして共有してほしいと考えたからです。

どこの自治体でも行っている手法ですが、これまでの予算は、例えば地方交付税や市税を上乗せして、歳入不足がないようにつくるやり方が一般的であり、口では財政が大変だといっても、市民も職員もあまり危機感は持たず、何とかなると思ってしまう。議員も厳しい、大変だと議会で議論はするけど、身につまされるほど厳しいと実感してもらえない。

市財政が大変なことを実感してもらうために、今までとは違った手法の予算をつくり、具体的な数字を示し市民、職員そして議員にも本気の危機感を持ってもらいたいと考えたのですが、結局議会で修正され、三億円の雑収入は計上せず、減債基金を取り崩して、一般会計に繰り入れることになったのです。

私は、減債基金は借金を返済するためのもので、コツコツ貯めてきた基金だから、一般会計へ繰り入れることはできないと抵抗したのですが、財政の担当者は、明らかに赤字である三億円の雑入を見込むよりは、いままでのように各費目に散らばせるか、減債基金から充当する手法の方が自分たちの面子を保てると考えていたのではないでしょうか。

結局、財政担当職員が元助役の議員にそれとなく示唆を与え、議会修正を経て、新年度予算が成立しました。

私は全く三億円の見通しがなかったわけではなく、一年間の財政運営で不用額が出たり、交付税は当初見込みより三億円くらいの増はあるだろうと見ていたのです。とにかく雑入三億円という目処のないお金を計上しなければ予算が組めないという窮状を住民に知ってもらいたかった。

結果的には私の予想が当たり減債基金を取り崩さずに決算ができました。

革新系首長と省庁・国との関係

（社会党、労働組合推薦の首長だと、国会議員から省庁の役人を紹介してもらう場合マイナス材料になると思うのですが、桜庭さんの情熱、行動力で克服した面もあるでしょうが、国との関係で苦労したことはありませんでしたか……）

当然ありました。さっきも触れた、自治省公営企業課長が公営企業債を発行するのに職員給与の一号俸削減を求めたのは、私が革新系で自治労に推されて市長になったことを知っていて削減できっこないと見たからです。つまり企業債の発行は認められないということです。そんなことはたくさんありました。

ただね、名寄市が抱えている個別の課題はそんなにお金がかかるものではないし、省庁の課長補佐クラスで大体目処がつく課題です。だから私が親しくした役人はノンキャリアの課長補佐クラスで、実務を担っているし、キャリアに対しては仕事もできないくせに俺たちが支えている、という自負がある。

そうしたノンキャリアの人たちと親しくなっていろいろな情報をもらう。課長補佐や係長と名刺交換をしたら、必ず自筆で礼状を送りました。役人は毎日書類の活字と格闘しているので、下手な字でも肉筆の手紙をもらうと、心に留めておいてくれる。

（省庁への要望、交渉はどうやられていたのでしょうか。がむしゃらに飛び込んでいくやり方もあれば、課長補佐に的を絞って物事を動かす戦略もあるでしょう。例えば当時の開発庁、農水省、建設省などへの補助金、公共事業をどのように陳情、要望していたのでしょうか……）

規模の大きなものは開発期成会で行動するのが一般的で、名刺交換をして関係をつくり、個別の課題について話をすることが可能な感触を得られれば、さらにアプローチをします。公共事業関係のことは、大体期成会のなかで決まっていくし、基盤整備事業であれば、土地改良区や農協が行政より先行して動いていることが多い。

私が市長のとき一番大きかった事業は市立病院の新築で、数十億円規模の事業はそんなにあるものではない。

ピヤシリスキー場のロッジが火災で焼失したので、新しくつくることなり、たしか当時の雇用促進事業団の事業として勤労者の福利厚生推進体育施設建設の助成金がありました。本来はスキー場

につくる施設の助成事業ではなく、多くの勤労者が仕事終えてから利用する施設として街のなかにつくる施設なんです。名寄駅から七キロの距離がありますが、五万分の一の地図でみるとすぐ近くにみえ、東京だと駅から七キロでも市街地ですから、粘りの勝負でスキー場につくることができました。

雇用促進事業団への要請に一緒に行った担当課長が「なかなか話が進展しないし、市長もう帰りましょう」と言ったのですが、私は「大丈夫、もう一押しで何とかなる」と粘りました。そして真冬に事業団からスキー場の体験視察に来てもらい、なんとか助成が決まりました。

高速道路工事が名寄の前でストップ

（各事業にはさまざまなドラマがあったのでしょうね。市長が直接担当者と膝詰めで交渉したとのことですが、政治家を介しての要請はなかったのでしょうか…）

市長のときに、旭川の今津寛・衆議院議員（自民党）の事務所を訪問すると、絶えずお金がない話ばかり聞かされて、革新系の私に対しても寄付してくれなどと言われました。

また上草義輝・衆議院議員（自民党）からは、ひどい嫌がらせ受けました。いまの高速北海道縦貫自動車道の当初の計画では、旭川から名寄までが施行区間だったのですが、それを名寄の手前の士別で切ったのが、上草議員です。北海道開発庁の地政課に圧力をかけた。そしてその後、細川護熙内閣で五十嵐広三さん（故人）が建設大臣になってから、国幹審（国土開発幹線自動車道建設審議会）の審議で名寄までの延長が決まったのです。

革新系の市長だからという理由だけで工事がストップされ、私は当時の地政課長に誰に言われて変更したのか、と詰め寄ったのです。革新市長だからなのか、変更理由を問い詰めると、経済効果だとか、財源を考えて、士別までにしたというのが、表向きの理由でしたが、地政課長の苦悩する表情を見ていて政治家の力が及んだものと確信しました。

革新の市長だからと市民に心配をかけたのは高速道路だけだったと記憶しています。保守系の市長だったら士別で切られないでもっと早く名寄まで高速道路が繋がったかもしれない。市民に与えた不利益を一日でも早く解消をしたいとの思いで、名寄以北の高規格道路（開発局直轄事業）を着工するのに必死に取り組みました。名寄から北の道路が整備されれば、士別と名寄をつなげなければ意味がないことを実証するため開発局に日参しましたね。

政治家を頼ることはなかったし、そうした頼る案件もなかったけど、唯一頼ったのは鈴木宗男さんです。友好都市のサハリン・ドーリンスク市から市民を迎えるにあたって、ビザ発給に時間がかかり煩雑でした。当時は外務省ロシア課には警察庁から出向している職員がいましたが、ビザの申請が山積みになっている。このままでは間に合わないので、当時外務政務次官だった鈴木宗男さんにお願いして便宜を図ってもらったことがあります。後に道議会議長になった喜多龍一さんは当時鈴木衆議の秘書をしていて、この件のあと、鈴木後援会への寄付を求められ、そのへんはしたたかですね。鈴木さんに対して多々批判はありますが、良くも悪くも本物の政治家だと思います。

国鉄分割民営化と名寄本線・深名線の廃止

（市長のときに国鉄分割民営化、名寄本線（名寄―遠軽）と深名線（深川―名寄）の廃止、機関区の縮小により、大きな影響がありました）

地元自治体として赤字ローカル線廃止に反対し、一九八九年の名寄本線廃止のときは森山真弓官房長官（故人）へ陳情に行きましたが、私が市長のときに国鉄が分割民営化され、名寄本線と深名線は廃線になりました。当時のＪＲ北海道専務の坂本眞一さん（後に社長・故人）とは、深名線を廃止してバス転換する代わりに、宗谷本線の急行宗谷を特急にする交渉をしました。そしてバス転換について私が深川市長と幌加内町長を説得することにしました。

バス転換が良かったのか悩みましたが、適切な選択だったと自らに言い聞かせています。私の毎日のウオーキングコースが転換したバス路線で、ちょうどバス運行の時間帯ですが、いつも一、二人くらいして乗っていません。

市長のとき二線を廃止したことを忘れないよう

胸に刻んでおくために、年に一回はＪＲ深名線バスで深川市までと、名寄本線の代替バスで遠軽町まで必ず行きます。

二線の廃止は時代の流れでしょうがない面もありましたが、いまの宗谷本線存続の課題にもつながります。結局地域は過疎になっていて列車を利用する人がいない。乗客を増やすために観光客の誘致に取り組んでいますが、観光のために列車を走らせるのが地域のためになるのだろうか。

宗谷本線は北海道の交通網の背骨だと思っています。一朝有事のとき、物流を考えたときに稚内までつながる背骨が必要です。

北海道がもっと真剣に将来の国づくり、北海道創りの展望をもって、背骨の宗谷本線や稚内―サハリン航路開設維持について積極的に取り組む必要があると考えています。

（多くの国鉄職員とその家族が名寄を去り、まちづくりの面でも影響が大きかったと思います）

まちづくりのなかで、旧国鉄職員が担っていたことを自衛隊員が肩代わりすることになった。各種スポーツ活動、文化活動、お祭りなど、そういう印象はあるよね。当時、国鉄職員はおおよそ七〇〇人いたと思います。家族を含めると三〇〇〇人くらいだった。

首長としてはどうしようもない、どうにもできない。いまも王子製紙が名寄にある王子マテリアの工場を閉鎖し、二〇二一年に苫小牧に集約する方針です。これは企業の論理ですから、地域の活性化のためだけに企業が仕事をしているわけではなく、企業活動が地域活性化につながっているだけですから、行政の力でどうするかは難しい。

王子の工場がもしなかったら、どういうまちづくりにするのかは絶えず考えておかなければならない課題だった。一〇年、二〇年先までのことを考える市民的な構想会議のような場が必要では…と思えてなりません。

いまの名寄市政で考えてほしいのは、基幹産業の農業をどうするかです。一五年ほど前に日経新聞で報道された予測では、その時点から三〇年後は温暖化でコメどころの新潟、秋田では稲作ができなくなり、稲作適地は道北地域になる。和歌山でミカンが栽培できなくなり青森が適地なる。そして青森でリンゴが作れなくなり、道北が適地になる。そうした予測を捉え、行政の担当者、首長と議員は一〇年先、二〇年先の備えを考えておくことが必要です。私自身、先を見通すことができなかった反省も込めて思います。

生意気な言い方ですが、首長や議員は当面する住民ニーズに応える施策推進も大切ですが、その地域の将来を展望したトレンドを示しその準備を推進することが最重要施策では…と最近は考えています。

8　五十嵐広三さんの後を受け、衆院選に立候補

突然の後継指名、市長を三期途中で辞し衆院選に立候補

（市長を三期途中で辞めて衆議院議員選挙に出ました。立候補しないでとの声が多かったようですが）

あのとき衆議院議員選挙に出ていなければ、あと一期か二期市長を務め、まちづくりに取り組めたのに、と言ってくれる市民がいまでもいます。でも、市長をつづけるのは三期一二年までが持論ですから、一二年で辞めると決めていました。なぜなら議員のとき前任の二人の市長に対して、一二年で交代すべきだと言いつづけてきたのに、自分が市長になって四期、五期もやるのは許されないという思いがありました。一〇年四カ月で辞めるのも、一二年で辞めるのも、大きな違いはない。

五十嵐広三さんが衆議院議員を引退するので、社会党上川総支部では五十嵐さんの後継者を誰にするかと選考していました。私は無所属で市長になっていたので、社会党の後継候補者選びには全く関わっていませんでした。

それがある日、総支部代表の舟山広治（道議会議員・当時）さんから「桜庭さんにはいろいろ心配をかけたけど、五十嵐さんの後継候補は士別市選出の佐々木隆弘道議に決まったので報告しておくから」と夜遅い時間に電話がありました。

私は突然のことなので驚いて、どういうことなのかと聞くと、「桜庭市長も五十嵐さんの後継候補の一人として名前が挙がっていて迷惑をかけたけど、別の人に決まったので」という訳です。

電話を切ってから妻と不可解な船山さんの電話の内容について話し合ったことを鮮明に覚えています。

その電話があるまで、私が後継者として取り沙汰されていることを全く知りませんでしたし、市長として毎日多忙だったので、考える余裕もなかった。

それから一週間ほど経って、五十嵐さんから、東京に来る機会があったら議員会館によってほしいと電話がありました。上京して事務所に行くと、五十嵐さんをはじめ北海道の社会党関係者が何人かいて、五十嵐さんの後継は決まっていたけれど、事情があって出られなくなった。官房長官まで務めた政治家が引退するにあたって、後継者を指名できないで辞めるのはしのびないことだ。ついては突然だけど、後継候補を引き受けてくれないだろうか、という話です。七月下旬か八月初旬のことでした。それから一カ月も経たないで決断することになったのです。

（八月はじめだと、秋の衆議院選挙が迫っている時期でしたね）

私は衆議院選挙に出ることなど考えたこともなかったし、以前言ったように市長になる気もなかった。でも五十嵐さんに直接頼まれ、自分なりに考えました。市長は、社会的地位や経済的なことを考えても、それなりにいい環境にあり、あと一期市長をやったとしても田舎での社会的地位を守っていけるのではないか、その方が楽だろう。

だけれどもこれまでの経緯を考えたときに、市議になりたくて、市長になりたくてなったのではなく、一活動家として社会党の活動、自治労運動の延長線上での役回りでやってきたのではないか。この先、衆議立候補の話を断って市長をやっていて正解だったと思うのか。あるいは市長を辞めて衆議選挙に出て負けて貧乏はしたけれども自身の信念を貫いて活動家として生きたと評価できるのか。どっちを選択するのか自分自身に問いかけました。そして活動家としての道を選びたいと決意した。

妻はかつて自治労組合員でもあったし、一緒に歩んできて、隠し事なく何でも話してきたので、衆院選に出る気持ちを伝えると「自身の考えだから反対はしない」と言ってくれました。それじゃ決断しようとなった。

後援会の役員や、支持をしてくれた市民の皆さんからは、なんで火中の栗を拾うようなことをするのだと怒られましたけど、なりたくて市長になったわけではないし、運動の過程の中で市長になった。先輩たちが戦っては負けつづける中でつくってくれた運動の中でたまたま担わしてもらった役割で、未練もなかった。

だからといって、火中の栗を拾うだけでいいとは思っていない。田舎の首長を経験しているが故に、国には言いたいことがある。国の役人に対しても体験を通して言いたいことはたくさんある。もし国会議員になったら、そうした生き方をしたい、やる以上はそういう思いはありました。

一九九六年、最初の衆院選（旧北海道七区）は北海道開発庁出身の金田英行衆議（自民）との戦いでしたが、惜敗しました。

元衆議院議員の安井吉典（故人）さんの奥さんは顔を合わせれば、桜庭さんは（小選挙区だから）貧乏くじを引いて大変だったね。うちのお父さんは（中選挙区だったから）三番目か四番目でも当選できたけど、桜庭さんは一番にならないと当選できないから大変だよね、とそう言って慰めてくれましたね。

でも私は選挙に負けて後悔はしていません。当時の小選挙区管内の上川・留萌・宗谷の四〇余市町村を訪ねて友人もでき、まったく分からなかった漁業を知ることができたし、いい勉強になりました。もし国会議員になっていたら、がむしゃらに走り回って身体を壊していたと思います。

党は民主党に、組合は連合になっての選挙

（市長選挙と衆議院選挙の戦いの違いはどのようなところにあるのでしょうか）

一人で会える人は限られるし、選挙区は四つの離島と四〇余の市町村、そして広大な面積ですから、市長選挙とは全く違います。地域に小さくても後援会をつくり、何人かの後援者が手足、スポークスマンになる組織がないと選挙は戦えない。大

都市部の選挙は風で動くことがあるかもしれませんが、地方はそうはならない。地道な後援会活動、時間、お金、人が必要ですね。

選挙を戦う労組は、地区労、全道労協から連合に代わったのが大きく異なる点で、市長選挙のときは全道労協だった。連合になってから各市町村の労働組合は、地域独自の運動が徐々に少なくなってきた。連合本部、連合北海道の指示に従って、指示通り地域でやればいいというように感じます。かつても全道労協の指示はあったけど、地域の労働組合は地区労として地域課題を取り上げて活動していた。大きく労働界が変わったことが一つあります。

一九八〇年代の臨調行革で、国鉄分割民営化をはじめかつての公労協の組合が衰退し、いま地方の労働組合は、自治労と北教組の二つくらいです。国労、動労、全林野といった組合がなくなってきましたし、かつては全逓が地域のことをよく知っていた。労働組合が大きく変わった時代の変わり目でしたね。

政党の変化もあります。社会党から名称を変えた社会民主党（社民党）で戦うつもりが、立候補を表明してすぐに民主党が結成されました。社民党の全員が民主党に参加することを決定したのですが、いろいろ経緯があって社民党に残る議員・党員が結構いました。道内社民党のリーダー的な人が名寄にいて、私の市長選挙を中心になって支えてくれたのです。そして名寄には国鉄清算事業団の組合員を中心に新社会党の人もいる。私はいまでも、社民党と新社会党の機関紙を読んでいます。

社会状況が変わってきて、労働界も政党も変わってきたときでした。衆議院選挙に出て負けましたが、全く悔いはありません。

小選挙区の区割りが変わり、三度目は断念

（二回目も出馬しましたが、もうこりごり、ではなかったのでしょうか）

一回目の選挙は小差の惜敗だったので、歯を食いしばって頑張れば二回目はいけるかもしれないという手応えはありました。ほとんどの市では競り勝ったのですが、町村で負けた。市部は労働組合の力があったけど、町村はそうならなかった。活動家としてやれるだけはやるぞという思いがありましたし、一回目は時間がなかったから、二回目が本番だという気持ちでした。しかし支援してくれた皆さんの期待に応えられなかったのは慚愧（ざんき）に堪えませんが。

三回目も挑戦しようと思ったのですが、選挙区の区割りが変わって断念しました。小選挙区の旧六区は旭川市のみが選挙区で、旧七区は旭川市を除く上川と留萌、宗谷管内の各市町村という区割りでした。それが変更になり、旭川市と上川が一つになって新第六選挙区になり、留萌は空知と同じ第一〇選挙区に、宗谷は網走と一緒の第一二選挙区になり、私が戦った旧七区は三分割されて戦う場がなくなった。

それで民主党道連からは、網走・宗谷の一二区での出馬を打診されましたが、私は名寄で市長の仕事をし、私の地元があるから選挙で戦ったのであり、ほかの選挙区で立候補したら、政治家になりたいのだろうというそしりを免れない。そして六〇歳を目前にしていたのでこの辺でいいだろうと自分なりに納得をして整理しました。

こんなことを言ったら政治家の皆さんに怒られるかもしれませんが、いまの政党の体たらくの状態を見ていたら、国会議員になってなくてよかったなと思いますよ。もし国会議員になっていたら、大げんかをして離党、無所属になっていたかもしれないよね。

だから民主党がなくなり立憲民主党ができたときも、立憲民主には入らなかったのです。二〇代で社会党に入ってから、初めて党籍をもたない無党派の市民になりました。

（市長三期目は無投票当選になったとき、自分の使命は終わったと言っていましたが）

四年に一回の選挙で、自分は何をしたいのか、このまちをどうしたいのかを有権者に訴えて、選挙の期間だけでも市民一人ひとりが、我がまちのことを考える機会にするのが、政治活動をしている活動家の使命だと思う。そのためには選挙を行うことです。

一期目、二期目は激しい市長選挙だったにもかかわらず、三期目は無投票になりました。議会が保守系の立候補を抑えたから無投票で当選できた、と全員が首長与党みたいな感じで緊張感がな

い。私はこれで自分の役割は終わったと思いましたし、ちょうど三期一二年になるので、別の人に譲るのが自分の生き方だという思いがあったのも事実です。

一〇年四カ月でしたけど、五十嵐さんから要請され、一活動家としての道を選択したほうが貧乏をし、人は笑うかもしれないけど、自分自身が納得できる。もし断って市長を三期全うする、あるいは周辺から要請されてもう一期やったとして、これまでの活動を振り返ってどうだったのか問い返したとき、結局楽な道を選んだなという思いになるだろうと。だから強がりでも何でもなく、精一杯頑張ることが出来たと思います。

9　ライフワークとして全国3300市町村を訪問

平成の大合併時期の市町村訪問

（全国三三〇〇市町村を訪問し『消えたまち　生まれたまち』（二〇一七・七・一七）にまとめました。やってみようと思ったいきさつからお願いします）

名寄市役所に就職したときから持っていた夢みたいな思いだったんです。自分が定年退職をしたら、全国の自治体を巡って確かめたいという思いをずっと持っていました。定年後のライフワークだと。

三回目の衆院選は立候補せずけじめをつける状況になり、しかしまだ隠居して家にこもる歳でもない。かといって勤めるといっても誰も雇ってくれないだろから、何をしようかと考えたときに、全国の自治体を訪問する時間はあると思ってはじめたのです。

たまたま平成の大合併の時期と重なったので、訪問記の表題を「消えたまち　生まれたまち」にしましたが、はやくしないと自治体がなくなるという焦りがありました。

私が市役所で仕事をしているとき市町村の数はおおよそ三三〇〇と言っていました。それが合併でどんどん少なくなっていく。三〇〇〇自治体があるうちに回らなければ意味がないので、四七都道府県を五〇回に分けて、必死になって市町村を訪ねました。

一番大変だったのは、市町村に連絡をして訪問の日時を決めることでした。市長のときは、職員にこういうものが必要だと指示すれば、作ってくれました。それが自分でスケジュールを組み、多岐にわたる事務的な処理をするのは大変でした。

どのまちの首長でも、一月前には翌月の日程は決まっていますから、訪問したいまちへは最低一カ月前に、まちを訪問する理由と自分の経歴を書面にして全ての自治体に郵送しました。この作業が膨大で大変でした。

たとえば徳島県内を回るとすれば、何月何日に徳島空港に着いてレンタカーを借り、翌日から県内を無駄なく効率的に訪問するため、「の」の字を書くように回るタイムスケジュールをつくる。首長への訪問依頼書は、このスケジュールを元に何月何日の何時ころに伺うと書きました。私の経験上、こういった依頼があれば、面白いやつがくるなと、忙しいなかでも二〇分、三〇分時間をとろうと思う首長がいるはずです。とにかく忙しいだろうからと、三〇分以内で面談時間をとってもらい、大体六割くらいの首長は会ってくれました。

統一選挙以外の首長選挙が多くなり、統一選後の首長名簿があっても交代していることがあり、首長宛ての依頼書を出すのに電話で名前を確認しました。

大きく異なる本州と北海道
フルセット型と役割分担する違い

（平成の合併のさなかでしたが、実感された地方の姿、自治の実態はどうでしたか）

まず北海道は本州とは違うということです。北海道庁が国の出先機関に成り下がっていることを改めて実感しましたね。道が本気になって北海道全体をリードする自治体としてやる気になったら、もっといい北海道ができる。

道が独自に考えて市町村と一緒に政策を実行するのではなく、国の施策が道に下りてきて、市町村に伝える役割しか果たしていないのではないか、

という思いです。

国会議員の違いも感じました。与野党を問わず、道内選挙区から選出されている衆参国会議員から、自分が知事だったら、あるいは自分は政治家として、こういう北海道をつくりたい、北海道はかくあるべきだという話を聞いたことがない。知事、市町村長、道議、市町村議に対して、サポートできることがあれば言ってくれ、手助けするよ。でも主体的に考えるのはあなたたちですよ、というわけです。

ところが本州の国会議員は、自分はこういう県にしたいという考えがあるんです。知事と市町村長を批判する国会議員、対して国会議員を批判する市町村長がいて、長い歴史の蓄積があるからなのだと思います。

合併問題でも北海道と異なります。本州では、たとえば極端な言い方をすれば、山を挟んでこちらとあちら側それぞれに村があり、この二つの村が合併をする。広い北海道で生まれ育ち活動してきた私にとっては信じられない合併で、なぜそんな不便なことをするのかと思う。でも合併する村は、かつては同じ藩だったのが明治の市制町村制で、別々のまちになり、合併で元にもどるのだから問題はないと言うのです。その逆もあり、元々藩が違うから合併するのは絶対嫌だと。北海道とは歴史が違いますね。

北海道となってからわずか一五〇年ですし、北海道の文化を大事にしていないと思いますよ。進取の気性とか、フロンティア精神があるとかいいますけど、時代が変わると新しいものに飛びつき、蓄積されていかない。本州の自治体は、我がまち、我が県で数百年つづく伝統、歴史の蓄積が、地域の行政、社会のなかに脈々としてある。そうしたものが北海道にはないので、一〇年、二〇年経つと時代が変わったからと、いい取り組みなのに別のものに変えてしまう。思い入れ、こだわり、執念みたいなものが足りない気がして。

（歴史の重みの違いが、自治意識の違い、自治体の姿勢の違いとして感じたことは）

いいのか悪いのか分からないのですが、道外の自治体では、地域といいましょうか、自分の先祖の墓を守るのが長男の役割で、それが地域を守ることになる。訪問したある町の町長室にたまたま町議会議長がいて、昼食を用意するからと自宅に招かれて行くと、これで商売が成り立っているのだろうかと心配になるような農機具屋さんです。聞くと東京工業大学を卒業して大手の農機具メーカーの部長を務めていたそうです。そして親父が引退するからと故郷に帰ってきて後を継いだそうです。

北海道育ちの者からみると、せっかくメーカーの部長までになったのに、商売になっているのかわからないような家業を継ぐことをよく決断できましたねと聞くと、四〇代まで好きにさせてもらったのでいい方だと言うのです。友人の長男は、三〇歳そこそこで呼び戻され、家を継がされた人がたくさんいると。先祖の墓を守るためにです。

長男に生まれた以上、後を継ぐのが当たり前であって、生きる延長線上の出来事として受け入れている。話をするまで想像もつかなったことです。

（一歩間違うと、保守的で排他的、非近代的なことになる。一方で地域を絶対に守るという自治的な行動に結びつくところと分かれますよね。北海道は本州みたいにしがらみがないから自由にやれるし、逆に無責任にもなる。自治の質を考えた場合にどんな違いがあるでしょう）

もう一つ感じたことは、北海道は何でもほしいのに対し、たとえば本州だとわが自治体は食糧を生産する役割を持っている。わがまちは地域の教育を担っている。わがまちは地域の商業活動を担っている、というように役割を分担し、長い歴史のなかでそうなったのだと思います。

距離の問題はありますが、道内市町村はどこでも高校がほしい、商店街もほしい、病院もほしい、全てがわがまちで揃っていて完結しないと気が済まない、フルセット型の発想です。本州の自治体はかつての藩の区域なのか分かりませんが、歴史的に培われた役割分担をしているように感じます。

こうしたことから見て、今後の北海道内のまちづくりで工夫する余地はたくさんあると思います。私は、北海道はいい自治をするための素晴らしいホームグランドだと思います。

本州は参考にならない、北海道のことは独自に考える

（本州の自治体は歴史的に広域的連携をせざる

を得なかったのかしれませんね）

何人もの首長から言われたのは、明治になって国がここは何々町、村にすると上から決めたことで、この集落は明治政府が決める前から何藩の下での営みがあった。市町村は国から被されたもので、それ以前からまちはあったと。それが誇りなのか、伝統なのか分かりませんが、多くの自治体で感じましたね。

全国の市町村を巡って感じたのは、本州のことは北海道の参考にならない。北海道のことは、つらくても独自に考えなければならない…という妙な確信です。

本州と北海道はまったく違います。たとえとして適切ではないかもしれませんが、私の三男は長野県にいて、本州で驚いたのは車で一〇〇キロ移動すると、三つか四つの県を通ることができることです。道内で一〇〇キロ、二〇〇キロ走っても一つの島だから北海道から出ることはない。一つの国なんです。

本のあとがきに書いたように、これから北海道をよくしようとしたら、道の振興局制度の改革が必要です。高橋はるみ前知事のときの支庁制度改革は、支庁の名称を振興局に変えただけなので、一四振興局区域の抜本的な組み替えを行うことです。

道議会議員選挙区が変更されるため道議会の賛同を得るのが難しく出来ないと言いますが、知事は道議会に問いかけるのではなく、道民から選ばれた政治家としての知事の考えを、直接道民に訴え、それを道民がどう判断するかです。道民に言う前に、道議・道議会の顔色をうかがうと、道議の本音は選挙区が替わるのはいやだから、総論は賛成でも各論は反対となる。

それと、札幌市にこんなに道議会議員が必要なのだろうか。人口割りで定数を決めるから多くなり、一票の格差を是正するためだと言いますが、一票の格差は本当にダメなのだろうか。そして一票の格差と投票率の格差をどう見るのか。いなかのまちでは、自宅から遠くに投票所があるけど投票率は高い。都会は近くに投票所があっても投票率は低く五〇％に満たない投票率で当選が決まっていいものだろうか。民主主義はどうあるべきとの議論をするべきです。

政党、政治家を振り返って

（最後に、桜庭さんの政治活動を振り返っていただきたいのですが、いままでの社会党の政治家で、横路さん、五十嵐さんとの思い出をお願いします）

かつて横路さんが社青同（社会主義青年同盟）の道央代表のとき、私が道北の代表をしていて、いろいろ大いに議論しました。横路さんは理路整然と議論しますが、私は声の大きさで負けないようにしていました……。

二〇一九年の道知事選挙のとき私が横路さんに言ったのは、横路さんが選対委員長になって、自分が知事候補のような気持ちになって道内を駆け巡ったら、石川ともひろ候補は当選できる。それ以外勝つ方法はないと。

我が陣営の方はそうした人材を有効に活用していないのではないのか。本気になって北海道を変えていく、もっとわれわれに力をつけていこうとするなら、かつての活動家を掘り起こして一つの役割をもってもらう。年をとっても元気な活動家はたくさんいるはずで、役割をもってもらう仕組みを考える。

五十嵐さんが旭川市長になったとき、上川管内の若い議員を集めて「広三塾」という勉強会をはじめ、そのころからの付き合いになりました。

安井吉典さんは私の父親で、五十嵐広三さんは年の離れた長兄だと思っています。五十嵐さんは商人、実業家出身であるがゆえに、独特の才覚があったように思います。五十嵐さんには随分と目をかけてもらいましたし、亡くなる三、四年くらい前までは、年に一度私と妻で食事に誘い、「あんたには貧乏くじを引かしたな、あはは」とねぎらってくれたりしました。そういう面では人との付き合い、人間関係を大事にしていたと思います。

（三人以外に印象に残った政治家はいますか）

政治家ではないですが、元内閣官房副長官の石原信雄さんとは、青年市長会時代から付き合いがあって、いろいろな学習会の講師を引き受けてもらい、多くのことを教えてもらいました。

政治家では鈴木宗男さんですね。先ほども触れたように、ビザ発給の件で助けてもらった。

（桜庭さんが議員、市長のときは社会党が変わっ

ていった時期と重なっています。市長になったときの委員長は土井たか子で、その後は、田邊誠、山花貞夫とつづき村山富市さんが首相となった自社さ政権では、社会党の基本政策が一夜にして変わった。そして社会党が社民党になり、民主党へと移り変わっていきました。社会党、民主党が果たした歴史的役割をどう思いますか）

政党は政治集団ですから、政権をとる力をつけなければ政治集団ではないとされます。しかし、力もないのに政権を取るというのは幻想だと思います。誤解を恐れずにいえばかつての五五年体制のような状況でもいいのではないか。安倍一強の自民党政権に好きなことをさせるよりも、安倍政権に一つでも二つでも手枷、足枷をする。

＜編集部注……一九五五（昭和三〇）年一〇月に左右に分裂していた社会党が統一。一一月には日本民主党と自由党が合併して自由民主党が結成され、二大政党対立の構図、いわゆる五五年体制ができた＞

力のなかった旧社会党であっても、いまの立憲民主党やかつての民主党以上に政権や個別政策の内容と決定に影響を与えてきたと思いますよ。政党に一〇を求めるのではなく、一つでも二つでも自分たちの主張を政策に入れ込んでいくことを考えていかないと。

中央でも地方でもそうですが、問題提起をした、反対討論をした、それなりに互いに理解したので賛成した、と先日の新型コロナに対応した新型インフルエンザ特措法改正案の可決もそうです（二〇二〇・三・一二）。

与党は多数だから、立憲民主が反対しても通るのだから、どういう理由で反対したのか、後に検証できる。審議過程のなかで反対しても最後は賛成したのであれば、過程は埋もれてしまう。

そういう面では五五年体制の意味があったのではないか。しかし五五年体制に甘んじているのはダメで、それを克服して、政権をとる状態に持っていかければならないけど、かつての五五年体制より悪い状況で国民に訴えても信用してもらえない気がします。

（町内会・自治会の役員は組合経験者が多かったけど、いまは少なくなっている。名寄はどうでしょうか）

名寄の町内会役員は市職員ＯＢがけっこうやっていますね。私の考えとしては、市の職員は墓場に行くまで自分のもらった給料のことを考えてくれと、市民に食わしてもらったんだから、そういう意識でいてくれ。だから退職したら、町内会役員や地域でのボランティア活動を行う。行政経験があっていろいろ知っているので、地域では重宝な人なのだから、率先してやるべきで、そうした退職後の活動も現役時代にもらった給料に含まれている、と言っているので、嫌がられています。

（二回にわたり貴重なお話ありがとうございました）

本稿は、二〇二〇年一月二三日と三月二七日に行ったインタビューをまとめたものです。聞き手は、山崎幹根・北海道大学教授（当研究所副理事長）と当研究所編集部。